



安全社会構築のために必要な仕組みを考える

の 野 ぐち かず ひこ
 口 和 彦†

現代の安全問題の特徴は、「安全を脅かす要因が技術の進歩、社会の進化によって派生したリスクにある」というところにある。

もちろん、地震等の自然災害への対処は、現在の安全分野においても重要な問題であるということは間違いないが、これは人類が挑んできた過去・現在共通の安全課題である。

これまでの安全（工）学は、科学技術・産業技術の進歩した結果として生じた負の影響が発生した時点で対策を検討するという受身の立場をとらざるを得なかった。言い換えると安全技術は、つねに産業技術と競争をしており、いまだに完全に勝利を収めるには至っていない状況なのである。

安全・安心社会を構築するためには、安全技術がこの戦いに勝たなければならない。しかし、現実社会を鑑みるとその希望はなかなか見えてこない。それは、社会において事業等が計画されるときにまず考慮されるのが、その事業によってもたらされるであろうプロフィットであり、重点的に行われる技術投資が、成果の最大化をもたらす技術分野の開発だからである。

しかし、いま市民が求めているのは、必ずしも経済の最大化ではない。三菱総合研究所の政策創発研究で行った社会の豊かさに関する重要度アンケートで、最も重要と考えられていた社会基盤の要素は「安全・安心な社会」の実現である（33ポイント）。

安全工学は、このような市民の期待に応えうる学問でなくてはならない。

そのためには、安全への技術もいくつかの新たな試みを行っていく必要があり、以下の提案を行う。

最初の提案は、安全（工）学が企業・社会のなかで重要なマネジメント技術として他のマネジメントと整合性を取ることである。安全マネジメントは他のマネジメントと一体となり総合マネジメントの一部として経営に取り込まなければならない。安全の重要性をいかに強調しておいても、安全に関する判断が経営の意思決定の最初の段階から重要な判断材料として存在する状況を作っておかなければ、安全マネジメントは

つねにセカンドオピニオンに留まることになるからである。このようなマネジメント体系を構築するためには、経営者が安全に対して深い理解を持つ事は当然のことであるが、安全関係者が経営を深く理解することもまた重要である。

つぎの提言は、安全工学が他の産業技術から独立した体系を有する学問として成立するように、安全工学の再構築を行うことである。つまりそれは、安全工学を安全安心社会を構築するというニーズからその研究テーマを設定しニーズを満足するレベルまで検討を重ねる学問構造にするということである。安全な状況は、安全を脅かす要因と安全であろうとする主体との関係で定まる。これまでの安全工学は、主として安全を脅かす要因の排除・コントロールという視点からとらえた学問体系であった。機械安全・化学安全等の分類がその考え方を示している。今後、安全工学が産業技術に先んじて安全を担保する学問となるためには、安全であろうとする主体からのアプローチを行うことが重要である。そのためには、安全・安心社会の目標・ニーズを明らかにする必要がある。社会のニーズに応える目標を設定し、その目標を達成するために必要な技術開発を行うべきである。

安全技術が産業技術に従属している間は、安全技術の勝利はありえない。

安全に関する環境は大きく変化をしようとしている。そのなかでも特に大きな変化として、安全を脅かす要因の多様化が挙げられる。現代の安全を脅かす要因としては、自然災害、施設事故、環境の悪化、疾病、食品・水に関する問題、資源・エネルギー不足、個人情報、不況、戦争・テロ等多岐にわたる。

そのような安全環境の変化に対応するためにも、安全工学も進化しなくてはならない。その進化のためには、安全工学関係者が安全・安心社会構築に必要な多様な問題の解決のために、自己の研究領域にかかわらず社会ニーズに応える新たな研究分野を切り開く新進気鋭の気持ちを持ち続けること、さらには目標達成のためにたがいの力を結集するというチームワークを構築することが重要であろう。私も安全工学のルネサンスに対して微力ながら協力を惜しまない覚悟である。

† (株)三菱総合研究所：〒100-8141 東京都千代田区大手町2-3-6